

KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
LICENSED PRODUCT



13
3022
2



へ13
3022
2

富士 三國一夜物語卷之二

東都 曲亭馬琴著編



第二編

富士右門龜と放り及商人五四郎が夏

柳との富士右門知之ハ三世薄命あして邊鄙の落魄するけり。

今不意幸福をひて父祖の耻を雪り絶する家を興まことを豫て

その吉兆ありり。いなる六月のたぐり一日假寝の夢の黒皮威の

鎧の龜甲形の古金襴の直垂を被て玳瑁の表装しける太刀を

俣面色うも墨の如くみして相貌頗兇悪なる武士北の方より

来つ右門が枕方の佇立ていひき。こゝろに數百年三穂の浦曲の

柵のあり。あつるみけり過て敵を捕りて既み命危し。此身を



三徳が崎の遊ぶをりて。こゝろの慈悲ふくむをまじう。ようてその
 頼をばえまらざる有り。わづらひ疾彼處のあまてこれと救ひ
 めらまら。あつて陰徳の報ひゆ。大なる幸福あるべし。ゆゑに
 おりば夢覺し。右門をのりておのりぬ。いと奇しきことなり。つ
 らうあまら。正しけまかて家と立出三徳の浦の赴きけるが。
 只見れば磯の松蔭の垂髪子居多集てうらまをう。言もま
 たら。ゆゑに夢み見つる。そのあまらぬこと。あつて此れ走り
 つきて見る。甲の長さ四尺あまら。もつらんとおがしき龜を
 海人の見あがり。押り石をりて撃殺さんとまら。りけり右門
 忽ちおのり。冥龜ハ玄文五色ありて神異の精よく存亡を

見吉凶をあるもの有り。あつて四神の北方玄武ハ龜の屬を北の
 陰ありてその色黒し甲のまら。つて鎧有り。こゝろて玄武といふ
 彼夢み見つる武士の扮立を思ひぬ。されば。あつてこの龜の救を
 求らるべし。こゝろ。やよ子どもよ。その龜我のゆせん。と
 あり。その中の羊まら。つる童まら。出て山身こゝろ貫ひ
 ぬ。何める。あつて。同の右門答て。けり。この母の亡日。あつて
 のを無下の死さん。が。い。け。ま。命。を。放。遣。る。べし。あつて
 り。こゝろ。彼童まら。を。使。て。頭。を。左。り。右。め。う。ら。ま。ら。あつて
 無用のもの。細く係るとまら。その細を破ら。して。大なる損を
 まら。ものぞ。汝。ホ。打。殺。して。棄。よ。と。伯。父。の。い。ひ。し。あ。つて。



富士石門
 夢の苦み
 虫まかりて
 冥亀をもち
 放ら



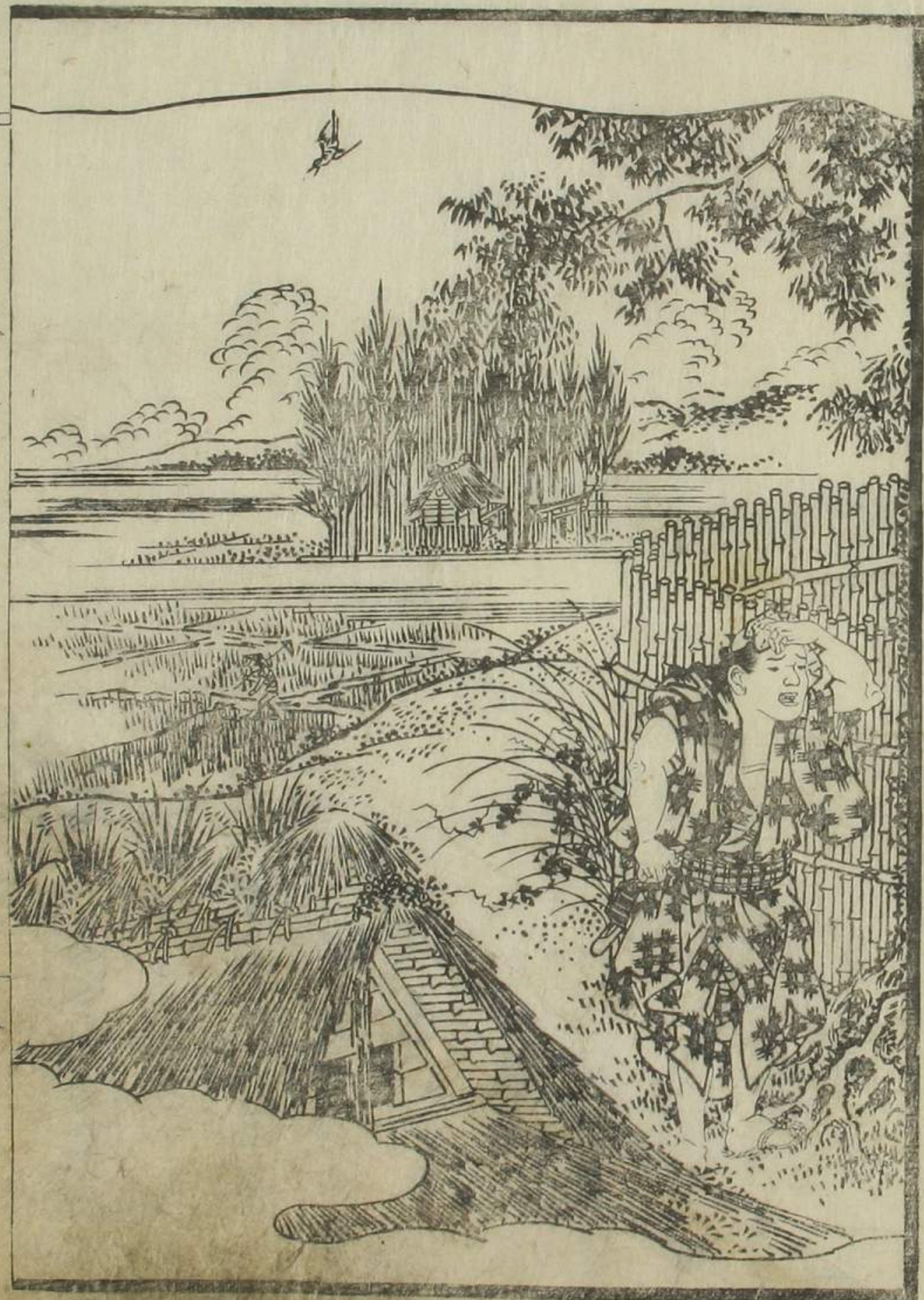
まぐらうちこころが今浴に赴く男のときさへしての忽地上の
御氣色と蒙り却て人の胡盧とさるべし。やせまの角を
せまぐらとさるるうらぬものゝあひひが侍と心へてまぐら
家ゆへうらぬ直み畑打川に至りて宇助めいぬ。あられけ
如此の幸福ゆつて懇る上の命を稟よりよりて近日
浴め上らば本領も下しぬべし。そまの就て典なるせらる
家の秘書を推問ゆつての整ひがさ。くりんの心なる似こ
まぐら吾身の性ハ豫てありぬいつらん浴め上り着まを彼秘
書と借ぬ金と日をも彼處より返し進らぬべし。と
宇助永女細ゆつて眉根をよせ頭を搔つりぬ。自身老

實あるひりこころもよくあらぬ殊更遺跡もいりぬ。彼が
筋より。あらぬほど。自身典物を借とさる他人も又
借らんとぬべし。活業ハ親き疎きぬもくづらぬ。只錢あるを
得意の人とさるが商人の生平なり。そのゆひのさる許しぬと
右門も道理の責らぬてあらぬ。まぐらバカ不工夫を
回らぬ金を調て又とさるべし。といひて退出ける。その時旅
商人とおがしき年紀三十の男貫布の袂を脊負ひ
ながら。店の床几ぬ尻うけて酒を飲居り。今右門が
とを去るをみて忙しく酒の價を償つ引つきて立出ける。
右門はものり整ひぬ。りょうの屈して暮らる路を急

三目六

是るべしといひ信じていふ右門ハ熟るの男と見る人
 証るべき癖者ともあがへど東言の中のみと都の手づらうち
 まどへて物のいびるも商人めきたればまづ心ちかて則答へ
 けるやう。つがう人せよくあつるふら。匿ひふより。日来ハ
 親く交參する人ぶも。金銀のりふつきてハ相語ぐまき
 ひあつる。斯懇の空えのみをうまてけれ。借する金ハ僅ハ五
 両をりの金もほど。それえ整うねぬる。ゆて幽き身ハ
 猜しあする。不よく。いひこまて。庇みぬる。ともあつるべし。回
 答されば。五四郎。安て。そハともくも。身ハ心ハ。任せぬ。人
 これを訪んとする。旅宿ハ府の街外ある。あつる。の野。あて

門のあつる。榎のり。そとと。目標の。いぬ。ハ。索。ね。迷。ふ。こと
 あり。吾も。旅。の。め。い。と。生活。の。為。ハ。朝夕。ハ。彼此。を。走り
 り。ぐる。る。ほど。亭。午。の。ころ。ハ。残。暑。も。烈。し。け。る。が。家。ハ。在。と
 あり。あつる。ほど。うち。語。ひ。つ。あ。つ。間。ハ。来。る。とも。あ。つ。て。茨。村
 ま。で。来。ぬ。ま。づ。右。門。ハ。つ。て。別。を。告。て。が。家。ハ。う。り。入。り。
 五四郎ハ。府。の。う。え。よ。ま。う。け。り。え。より。右。門。ハ。子。ども。二。人。の。り
 けり。冢。子。ハ。富。士。太。郎。と。名。づ。け。て。今。茲。十。六。歳。ハ。多。し。次。ハ
 女。見。ぬ。小。雪。と。名。づ。け。る。が。十。四。歳。ハ。め。ど。あ。つ。け。り。い。づ。れ。も。面
 白。生。育。ぬ。と。その。性。ハ。伶俐。と。ま。づ。拙。と。い。ふ。次。女。も
 ま。ま。い。風。流。と。る。若。子。少。女。と。あ。つ。る。ま。ま。妻。の。名。ハ



右門府中の
五郎を訪て
金を借んと欲

三雲といひておるト村の武士の浪人菴原某が女思ひを早く
 父母を喪て便りなきもの事と心ざりていざぬりいへりけむとて右
 門が父世のあつていざぬり迎へていざぬり妻のあつていざぬり却説
 右門の五四郎が懇ろのあつていざぬり力せぬとていざぬりいざぬり
 けむが家のあつていざぬりけむの首尾をいざぬり子もいざぬり語らぬ其
 夜まづ潜め妻の三雲のいざぬり一五一十語果てていざぬりやう。樂
 譜を携うれば浴へ上りていざぬり詮る。いざぬりいざぬり猶豫せむ
 遅来の罪脱が。然るに勅めらるるいざぬりせむ子もいざぬりホに
 そらぬいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬり
 まていざぬりいざぬりいざぬり五四郎がいざぬりいざぬりいざぬりいざぬり
 語り

三雲もいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬり
 うく僥倖あると強才學の勝るものいざぬりいざぬりいざぬり
 神の授けの幸福ゆて五四郎とやうに信じていざぬりいざぬりいざぬり
 只いざぬりいざぬりいざぬり皆是れ身が誠心と祖父君や父母の護て
 家を興さるるいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬり
 りと整へりいざぬりいざぬりいざぬり右門もいざぬりいざぬりいざぬりいざぬり
 りいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬり
 府のいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬり
 榎のいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬり
 老驍のいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬり
 波のいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬり
 只いざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬり
 假寐して枕方いざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬりいざぬり
 屏風を

来して一夜明きをゆつゝ金をばその時敷のごとく貸まかせ。
 さて明きぬるともみ旅がはらうくのどくせむも疑ふ
 りなきて支速の調ふべしとこ只一夜のひごうとの右門
 そのひを安て縦一夜のひごうとも僅の金の子と質と
 せんひの恥をばひひりたりとらひひりたり便なけむのひりも。
 回答をそめてり整ひぬ妻の語をてま訪まらせん
 など相語ふ間も早晩日も傾きて茅蜩も軒端ちく鳴も
 秋の初風涼ちるまづ帰るぬ路も行易し母の言もよく言
 告てぬととひりり草履穿ちりて走り出申夜なる頃家の
 帰り着三雲のあつぐのひりりしと物ぐれば三雲がひりり。

小雪ハハハ十五歳ハハハ満ちる少女あり殊ハハハ彼人の母ハハハ
 在まらば一夜その家の領おくと何々苦しうはるべき。
 うぶりのひを厭てひを誤めひそと諫まども右門ハハハ猶心も
 決せどその詰朝國守恭範の老臣より尺書到来し頃ハハハ
 命言ぬまばいそぎ茶上あるべしと告来まり右門ハハハまきせ
 讀て何りやんと詰とひひりり野のたる古袴の破き
 たる裾を結びぬせらどして縛締かてその使とまひ
 國府の城ハハハ赴きけり三雲ハハハ一昨日のひもあまはるね
 筋する使ハハハあつとと思ふどもいま備由をあらが
 ぶ。ひと覺つゝなきて夫のうら来るをまつぬ富士太郎

兄弟きょうだいはうろつるあるべくとも思おもひくけむ。驢うま嶋じまめて綱あづな引ひきて。
 居い多た漁りりしとゆい瓜うり茄子なすをりてゆきてそれと換かへしとて同胞どうぱうのちとも朝あさままきより彼か所ところへ行ゆくはゆい。
 うぐむ三さん雲うんハ夫おつとを待まちとまらわらぬその人ひとのぬらむして二ふた
 人にの子こどもが鬻うりと筑つくみ入いきうらむ。うき擔かひくうり来きれり。
 活くわる折せしも富士ふじが家いへの商あきなひ人ひとりきうらる男おとこ一ひと蓋かきの日ひ遮よけ笠かさを
 して来きてゆいやうやう使つかもあびぬひけん。そまがうら五ご四し郎らうと
 ゆいゆい嚮むかひ右みぎ門かどぬし。こが家いへを訪たずねて宣のたまふやう。旅り
 だちもたわけ入いり翌あした日ひのり迫せまりぬまば。約やく束そくの金かねうして之これ
 こまらその金かねをりて畑はたけ打うち川がわへ行ゆくまば。身みへ又また家いへの

いゆきて妻つまめとまらうの言こと告つぐし女に兒こを誘いざなひ引ひくうて今いま宵よハ
 雷かみなりあきぬ人ひと翌あしたハ天あま明あけのころゆらともみ起おこ程ほどけらべし妻つまも
 大おほく心こころをゆいさむとゆいまの身みを足たりりけまば。こまら
 して證あかしとゆいゆい人ひとと宣のたまひて笠かさをたこまらぬ通とほり金かねをまら
 懐ふところめして忙いそがしうらぬぬ定おぼて足たりぬるべしとゆい。三さん
 雲うん使つかてまらぬ國くに守まもり召よきし人ひと旅りぶらむをりまらぬ。
 けりうと思おもふゆいゆい合あひるうらぬ笠かさの紐ひもハ夫おとこが汗あせ衫ぎんの
 裁きせりてこが縫ぬいをうらぬゆいゆい。まがゆいゆいゆい。
 聊いさも疑うたがひゆいゆいゆいゆい。ゆいゆいゆい。ゆいゆい。
 この人ひとハ五ご四し郎らうどのとゆい。府ふの街まち外がわの在あるまらぬ。此こゝ度たび



父也とそもみ浴上り志のふあり。よろそ也身ハ今より彼處
 のきて在せ。故郷も今宵一夜の名残ありぬ。のまりぬ
 頃のみまば。いまご也身兄弟の語らざりしが。あしき
 めてはまり。是も父也の為りなり。とゆふ小雪ハ元より
 孝心ふりく父の為と安て聊も推辞も。そのついでも問ひ
 諦むして五四郎の伴にきて府のくえ立出けり。富士
 太郎ハ年が少しきど。いと伶俐けき。今ちぬ男が妹を
 伴ひゆくを見て母のりりける。何事も思ひ辨れん。と
 只一盞の笠せしめて。妹を人の妻ねぬハいとあはれ
 うさひゆとと不審り。いづ三雲答て也身はまご縁故を

志の疑ひゆふもこそりゆと。そちあづぶのひりゆとて。
 右門が義満公の恩命をゆりとり。樂譜と質として
 宇助の金を借するが。今愛復さんとまらぬ術ありし。五四
 郎が安まりてゆく。憐れ。金と貸んといひし。りまや首尾委細
 語り果てゆかりこのひつきて。父也もゆくむの思ひを届し
 めひしが。いま整正さる。福も福の端とあるべし。まが子ども
 父のあまらるるひりゆれと宣ひしを。今またるひりゆれ。彼
 五四郎が家。少きのみ父也も索ねぬ。ひて母刀自の在せ。も
 見て帰りゆ。縦今宵一夜小雪を彼處の領おくと。何の
 過のつと。いづ富士太郎も父が幸福をゆりゆと安て深く

歡びうまは。彼是る親の爲り。よや宿遊君の身をまも
 とも。父ふ世の出るる。敢て歎く。さあわらど。況まぬ家の
 一夜。むりの宿り。きつる。ゆめ。数ふと。いふ。母もいと。嬉し
 俄頃。旅の用意。なごし。あつらふ。夫を待。且して。右門
 うり。来ぬ。けま。三雲。富士。太郎。ハ。その。左。右。の。居。より。て。國
 守。より。召。ま。ぬ。ひ。一。何。ゆ。ゆ。て。け。り。一。さ。く。せ。ぬ。人。と。い。は。ば。
 右門。含。咲。て。物。ハ。案。む。る。より。有。無。ハ。安。し。と。い。ふ。ぞ。う。さ。る。
 け。ふ。一。召。召。ぬ。應。心。して。城。の。糸。り。一。六。茶。範。ま。ぐ。り。對。面
 ありて。宣ふ。か。り。上。ゆ。も。ま。の。歸。洛。の。赴。き。ゆ。ひ。一。さ。ま。ら。わ。ら
 台。命。ゆ。より。て。金。百。兩。下。一。賜。ふ。ま。り。る。不。道。中。傳。馬。の。り

あど。さ。より。よ。ま。さ。沙。汰。ま。ま。一。ゆ。き。行。装。を。り。の。入。て。上
 洛。せ。よ。と。命。せて。君。恩。寔。の。残。る。う。も。な。け。ま。ば。坐。の。感。涙。の
 び。を。び。り。その。金。を。賜。ふ。て。城。を。退。き。直。小。畑。打。川。の。宇。助。が
 店。小。至。り。て。家。の。秘。書。を。も。受。り。て。来。ぬ。小。雪。ハ。ら。ち。あ。る
 あ。る。今。を。語。り。交。せ。て。歎。ま。げ。ま。と。い。は。ば。三。雲。も。富。士。太。郎。も
 顔。ら。ち。瞻。ら。ま。て。あ。ら。一。呆。ま。し。り。け。る。が。三。雲。ハ。忽。地。泣。声。の
 ありて。い。ま。り。あ。ら。あ。は。は。ら。ら。う。る。変。と。い。つ。る。あ。ら。も。今。少。一。前
 時。五。四。郎。が。来。て。如。此。の。の。り。ま。ま。ば。小。雪。を。持。て。ゆ。く。あ。り。是。を
 り。て。證。ぬ。せ。よ。と。て。身。を。違。与。し。の。ひ。一。と。い。ひ。て。その。笠。を。持。て
 来。ぬ。ま。ま。よ。も。恨。の。り。と。思。ひ。て。その。人。と。とも。め。小。雪。を。さ。ら。ち

遣ぬ。さるる彼が跡なき空言あるのを何とせんと慌忙く
 ぬぞ右門大ぬうち驚きその笠ハよきまの五四郎を訪へて
 戴ゆき彼が門の榎の枝に置りてきて飯をとり紛きて
 けまぬ身ハその語を語らざりし。あつを今その笠をりて
 内男を祈り女兒を伴ひゆきしと思へば彼ハ拐見はてありつるを
 いま遠くへ行へども追蒐てこそ思せり復してんと
 のさままづ外へ走り出ま六富士太郎も後まゝと父の引
 副ゆくかどふ中て府の街外まで走り来り右門ま五四郎が
 家へ至りてひそかにか闕窺るまきのの婆も打狀居まは
 少し心あちかて親子のろとも裡へ入り家の四隅をりり

見まど索る人ハ在らざりてあらぬ男と女の主けが自今外より
 歸りぬと思へて夕喰食べて居りし右門親子を見てあら
 より来りぬ人ぞと問ぬ右門答てまは五四郎のあひま
 わりて来りぬものなりと云ふ彼男いと奇げなる顔してこそ家ハ五
 四郎とのみのなり。その門をとり違へぬつらんと云ふ右門が曰
 ぬまきのふもへと云て五四郎のあひぬ且彼處ハ臥するハ
 五四郎が母刀自り。ふく藏へぬと。とくその人を出て
 のらせよへと云ふと云へば彼男忽地頬のあつと云くよめとの
 人ハあひぬをひののる。か名ハ二三五と呼まて家の
 主人より又彼首をりか母より近曾中風ぬて足も腰も

立む物よりまきまき。夜も晝も打ふしとあはせど夫婦が草
 野へ出るとまき。案山子ながらの番守させしを五四郎とあはれんが
 母よりと。孰か也身中つる。えより五四郎といふ人を合二箇
 たりひまけまき。その名ふまき。思ふよるあつりの郊原のま
 狐の柵まき。也身定て野干まき。妖まき。ひつり。よく
 心を鎮てまき。思ひ量りまき。と辱し懲せ。右門やうやく
 心づきて。まて五四郎らの夫婦が晝ハ野み出てる。婆人
 居るひをよまき。あのみが家まき。偽り。まきを誘引ける
 よとあはれ。只管怒りの堪まき。しつみとせんまき。まきまき。
 主人の對て其許の宜まき。まき。まき。まき。思ひ誤る鹿忽の

高木よその



